



対訳で楽しむ

## 『失われた時を求めて』

スワン家のほうへ 1

高遠弘美

マルセル・プルースト Marcel Proust (1871-1922) 作『失われた時を求めて』 *À la recherche du temps perdu* (1913-1927) は、Pléiade 叢書新版で4冊。本文だけで3000頁を超える大長編小説です。全7編 (I. Du côté de chez Swann, II. À l'ombre des jeunes filles en fleurs, III. Le Côté de Guermantes, IV. Sodome et Gomorrhe, V. La Prisonnière, VI. Albertine disparue / La Fugitive, VII. Le Temps retrouvé) からなる作品の全訳には、新潮社版6人の共同訳13冊、ちくま文庫版井上究一郎訳10冊、集英社文庫版鈴木道彦訳13冊と、全14冊の予定で刊行中の岩波文庫版吉川一義訳と光文社古典新訳文庫版拙訳の5種類があります。作者が校正途中で世を去ったため、とくに後半に異同が集中しています。まずは有名な冒頭から。主人公は半睡状態にあります。

Longtemps, je me suis couché<sup>1)</sup> de bonne heure. Parfois, à peine ma bougie<sup>2)</sup> éteinte, mes yeux se fermaient si vite que je n'avais pas le temps de me dire : «Je m'endors.» Et, une demi-heure après, la pensée qu'il était temps de chercher le sommeil m'éveillait ; je voulais poser le volume que je croyais avoir encore dans les mains et souffler<sup>3)</sup> ma lumière ; je n'avais pas cessé en dormant de<sup>4)</sup> faire des réflexions sur ce que je venais de lire, mais ces réflexions avaient pris un tour un peu particulier ; il me semblait que j'étais moi-même ce dont parlait l'ouvrage : une église, un quatuor, la rivalité de François I<sup>er</sup> et de Charles Quint<sup>5)</sup>.

**訳** 長い間、私はまだ早い時間から床に就いた。ときどき、蠟燭が消えたか消えぬうちに「ああこれで眠るんだ」と思う間もなく急に瞼がふさがってしまうこともあった。そして、半時間もすると今度は、眠らなければという考えが私の目を覚まさせる。私はまだ手に持っていると思っていた書物を置き、蠟燭を吹き消そうとする。眠りながらも私はいましがた読んだばかりの本のテーマについてあれこれ思いをめぐらすことは続け

ていたのだ。ただ、その思いはすこし奇妙な形をとっていて、本に書かれていたもの、たとえば教会や四重奏曲やフランソワ一世とカール五世の抗争そのものが私自身と一体化してしまったような気がするのである。

**注** 1) se coucher の直説法複合過去。小説の書き出しとしては珍しい (p.59 コラム参照)。2) 既に普及していたオイルランプその他の照明ではなく、古来用いられてきた「蠟燭」としたことによって、ゆらめく記憶の光を便りに過去へと遡る小説的な効果が生まれただけでなく、少なくともここでは照明器具から時代を特定できないということからすれば「いづれの御時か」にも繋がる、まことに秀逸な書き出しだと言える。3) 前行のposer と同格で、voulais に繋がる。4) ne pas cesser de ... 「～し続ける」だが、ジェロンディフ (en dormant) が間に挿入されている。5) François Mignet : *Rivalité de François I<sup>er</sup> et de Charles Quint* (1875) を念頭に置いた表現という。

「私」はそうして夢とうつつの間を行き来しながら、ふと目覚めるのですが……。

J'appuyais<sup>6)</sup> tendrement mes joues contre les belles joues<sup>7)</sup> de l'oreiller qui, pleines et fraîches<sup>8)</sup>, sont comme les joues de notre enfance. Je frottai une allumette pour regarder ma montre. Bientôt minuit. C'est l'instant où le malade, qui a été obligé de partir en voyage et a dû coucher dans un hôtel inconnu, réveillé par une crise, se réjouit en apercevant sous la porte une raie de jour. Quel bonheur, c'est déjà le matin ! Dans un moment les domestiques<sup>9)</sup> seront levés, il pourra sonner, on viendra lui porter secours. L'espérance d'être soulagé<sup>10)</sup> lui donne du courage pour souffrir. Justement il a cru entendre des pas ; les pas se rapprochent, puis s'éloignent. Et la raie de jour qui était sous sa porte a disparu. C'est minuit ; on vient d'éteindre le gaz ; le dernier domestique est parti et il faudra rester toute la nuit à souffrir sans remède<sup>11)</sup>.

**訳** 私は、気持ちのいい枕の両側、頬を思わせるあたりにそっと自分の両頬を押し当てる。枕の頬は私たちの幼年時代の頬のように、ふっくらとしてさわやかに感じられる。時計を見るために私は隣寸をする。もうじき午前零時になる。午前零時。それは旅を余儀なくされて、見知らぬホテルで寝なくてはならない病気持ちの男が、発作で目が覚めた拍子に、ドアの下から差し込む一条の光に喜びの声をあげる頃おいである。ああ、よかった。もう朝になった！もうすぐ従業員たちも起こされるだろう。そうしたら呼び鈴を鳴らせばいい。誰かが助けにきてくれるはずだ。助けてもらえるという期待が、苦痛に耐える勇気を与えてくれる。そう、いましも、足音が聞こえたではないか。しかし、足音は近づいたかと思うと、遠ざかってゆく。ドアの下の光の筋も消えてしまった。ほんとうはいまは真夜中で、ガス灯が消されたところだ。最後の従業員も

行ってしまったから、一晩中、薬のないまま苦しまなくてはならない。

**注** 6) 「絵画的半過去」とも読める。瞬間的な行為を「語者の意識を通じて読者の眼前で行なわれているかのようにいきいきと描き」出す用法(白水社『フランス語ハンドブック』)。自然に「物語的現在」に引き継がれて、話者の内的持続を鮮やかに示す。次行 *frottais* も同様。7) 柔らかい 枕の中心に、たとえば仰向けに頭を埋めたとき、上に持ち上がる左右の部分を目指す。この *belles* は *agréables* と *favorables* を含意している。「美しい」だと視覚的な要素が強まるのであえてこの訳語にした。8) *Qui donne une sensation de fraîcheur agréable (Le Grand Robert)*。「枕の頬」を形容するのに適当な訳語はと考えた末に選んだ訳語。9) ホテルであれば「従業員」全般を目指す。動詞は *lever*「起こす」の受動態。10) *soulager*「苦痛から解放する、楽にする、助ける」の受動態。11) *remède* は「薬」そのものを指す言葉。

「私」はなおも半睡状態の不安定な意識の中で、自分がどこにいるのか、いつの時代に生きているのかを思い出そうとしては、さまざまな場所と時間をたどり、夢とうつつのあわいを漂った果てに、ついにははっきりと目を覚ますことになります。

*Certes*<sup>12)</sup>, *j'étais bien éveillé maintenant, mon corps avait viré une dernière fois et le bon ange de*<sup>13)</sup> *la certitude avait tout*<sup>14)</sup> *arrêté autour de moi, m'avait couché sous mes couvertures, dans ma chambre, et avait mis approximativement à leur*<sup>15)</sup> *place dans l'obscurité ma commode, mon bureau, ma cheminée, la fenêtre sur la rue et les deux portes. Mais j'avais beau*<sup>16)</sup> *savoir que je n'étais pas dans les demeures dont l'ignorance du réveil m'avait*<sup>17)</sup> *en un instant sinon*<sup>18)</sup> *présenté l'image distincte, du moins*<sup>19)</sup> *fait croire la présence possible, le branle était donné à ma mémoire; généralement je ne cherchais pas à me rendormir tout de suite; je passais la plus grande partie de la nuit à me rappeler notre vie d'autrefois, à Combray chez ma grand-tante, à Balbec, à Paris, à Doncières, à Venise, ailleurs encore, à me rappeler les lieux, les personnes que j'y avais connues, ce que j'avais vu d'elles, ce qu'on m'en avait raconté.*

**訳** たしかに、いまや私ははっきり目覚めてしまい、私の体も最後の寝返りを打ち、確かな事柄を司る善良な天使が私の周囲のゆらぎをすべて止め、そのおかげで私は自分の部屋で自分の毛布にくるまり、暗闇のなかでも、おおよその位置に、私の箆笥や机や暖炉、それに通りに面した窓や二つのドアがあることが感じられるようになった。だが、目が覚めたばかりの不確かな知覚のせいで、はっきりどこと思い浮かべたわけではないにしても、少なくとも自分がそこにいるのかもしれないと信じ込んだ住まいに実際はいなかったことがわかっていままさらどうしようもなかった。私の記憶にはすでにはずみ

がついていたのだ。そんなときはたいてい、すぐにまた寝ることはせずに、コンブレーの大叔母の家で、バルベックで、パリで、ドンシエールで、ヴェネツィアで、またそれ以外の場所で家族の誰や彼やと過ごしたかつての日々を、さらに、さまざまな場所やそこで出会った人びと、そうした人びとについて実際に見た振る舞いや聞いた話を思い出して、夜の大半を費やすことになった。

**注** 12) *Certes* は *mais* (ここでは5行目) と対応して譲歩を表す。「たしかに」。13) *le bon ange de* はふつう「～により影響を及ぼす人」の意味で用いられるが、「人」の存在が直接現れているわけではないし、とくにここでは眠りや覚醒を司る超越的存在の意味合いも感じられるので、あえて逐語的に訳した。14) 直接目的語の場合、不定代名詞の *tout* は過去分詞の前に置かれる。ここでは *la certitude* との兼ね合いから言葉をつけ足して訳した。15) この *leur* は、*ma commode* 以下 *portes* までの名詞を受ける。16) 〈avoir beau + 不定法〉「～しても無駄である」。17) *m'avait* は *présenté* と *fait croire* に続いて直説法大過去になる。18) 「譲歩」を表す。「～でないにしても、少なくとも」しばしば19) のように *du moins* や *au moins* を併用。

#### 冒頭の複合過去

ふつう小説の冒頭は直説法半過去ですが、この長編は複合過去で幕を開けます。草稿では、主人公は〈*J'étais couché depuis une heure environ.*〉〈*Depuis longtemps je ne dormais plus que le jour...*〉などという半過去の表現を通じて、朝になってから床に就き、昼の間に眠ることになっていましたが、決定稿では、「早い時間に」*de bonne heure*「就寝した」*je me suis couché* (複合過去) ことになりました。それには意味があります。半覚半睡の主人公は文目もわかぬ暗闇の中で空間的・時間的意識を失った不安定な状態そのものを通じて(これが重要です)過去に分け入ってゆき、やがては過去の総体を取り戻します。それにはどうしても夜中に目覚め、闇の中で半睡状態のまま記憶の奔流に身を任す「私」が必要でした。その「私」を、今は病気のために夜は眠れず昼間寝るしかない「私」の存在と対比させて、話者の内部では繋がっていても、事実としてはすでに完結した過去の行為の主語として登場させるために、複合過去が使われたということになりましょうか。この複合過去の用法は、「孤立した過去の事実」を示すものであると同時に「限定された期間における継続的・反復的行為」(白水社『新フランス文法事典』)をも示すもので、*Camus: L'étranger* の場合とは異なるにせよ、まことに印象的な書き出しです。作品の最後は〈*dans le Temps*〉で幕を閉じ、冒頭の〈*Longtemps*〉と見事な円環構造を形づくりませんが、下線を引いたこれらの鼻母音のくぐもった音は暗闇から姿を現す過去への旅を象徴しているようにも私には思われます。

\*原文は *Du côté de chez Swann, À la recherche du temps perdu*, Pléiade 版から引用。  
\*訳文は拙訳『失われた時を求めて 第一篇 スワン家の方へ I』(光文社古典新訳文庫)を使用。  
(たかとお・ひろみ)